

# 朝鮮前期韓日関係史研究の現況と課題

—2000年～2007年の研究成果を中心に—

韓文鍾\*

- I.はじめに
- II.概観および外交体制
- III.倭人の統制および接待
  - 1.倭人の通交および統制策
  - 2.向化倭人、受職倭人、受函書倭人
- IV.三浦と韓日関係
  - 1.三浦と倭館
  - 2.三浦倭乱とそれ以後の韓日関係
- V.交易
- VI.使節の往来と文化交流、相互認識
  - 1.使節の往来
  - 2.被擄・漂流民の送還
  - 3.文化交流
  - 4.相互認識・人物
  - 5.教科書問題
  - 6.その他
- VII.おわりに

## I.はじめに

1945年から2007年までに発表された朝鮮前期韓日関係史に関する論著は、『韓国史研究彙報』(国史編纂委員会)と『韓日関係史論著目録』(韓日関係史学会)、「韓国史書誌検索」([www.hongik.ac.kr/~khc](http://www.hongik.ac.kr/~khc))を通じて著書(博士学位論文を含む)9冊、個別論文133篇を確認できる<sup>1</sup>。これを発表時期と研究主題別にわけて整理すると次の〈表1〉の通りである。

\* 全北大学校人文大学史学科副教授

<sup>1</sup> 1945年から2001年4月以前までの研究成果は拙稿「朝鮮前期の回顧と展望」(『韓日関係史研究の回顧と展望』国学資料院、2002年)を参照した。倭寇と壬辰倭乱についての研究成果は別途に研究が進められているので、本稿では議論の対象から除外した。

〈表1〉朝鮮前期韓日関係史研究論著現況（1945-2007）

主題 時期	概観 時期区分 外交体制	倭人の通交と 統制、向化 倭、受職・受 函書倭人	三浦と倭館、 三浦倭乱前後 の関係	交易	使節往来、被 虜・漂流人の送 還、文化交流、 相互認識	その他 教科書問題	小計
1945-1959	0	2	1	0	0	0	3
1960-1969	2(1)	1	7	7(1)	4	1	22(2)
1970-1979	3	0	0	0	4	2	9
1980-1989	3	0	3	1	5	1	13
1990-1999	11(1)	4	4	2	13	6	40(1)
2000-2007	7(1)	11(2)	3	4	22(2)	8(1)	55(6)
小計	26(3)	18(2)	18	14(1)	48(2)	18(1)	142(9)

\* ( )は著書または博士学位論文。

\*韓国内で発表された論文を対象とし、修士学位論文は除外した。

\*個別論文が単行本や学位論文に収録された場合には、別個の論文として扱った。

\*朝鮮時代の韓日関係史関連の単行本は著述として扱わず、その本に収録された朝鮮前期関連の論文のみを個別論文として扱った。

上の〈表1〉によれば、朝鮮前期韓日関係史研究は、1960年代から活発に行われているが、その背景には李鉉淙と金柄夏の2人の研究者の貢献が非常に大きいといえる。特にこの時期に朝鮮前期の韓日関係史の著述が2冊も出版された。その後、1970年代と80年代に研究は減っていったが、90年代に再び増加している。これは1988年のソウルオリンピックを契機として韓日関係が友好的に展開する中で、日本に対する関心が高まり、1992年7月の韓日関係史研究会発足を契機として、研究者が朝鮮前期韓日関係史に関心を持つようになったためである。これに加え、1990年代中盤には日本へ留学した研究者が帰国することで研究がさらに活性化し、このような傾向は2000年代にも継続した。特に最近では、日本の歴史教科書問題が韓日間の外交懸案として台頭する中、朝鮮前期の韓日関係史に対する関心もさらに高まった。

一方、研究主題別に見てみると、1960年代には朝日間の貿易と、三浦倭乱前後の時期の制度史研究が主として行われた。その後、1990年代には使節の往来に伴う人的・物的交流と、相互認識や外交体制についての研究が多く、次第に研究分野が明・朝鮮・日本の間の外交関係および両国の山城比較などに多様化していった。2000年代に入ってから、日本の歴史教科書問題と共に、朝鮮前期の対日外交専門家である李藝と申叔舟の『海東諸国紀』の研究が非常に活発に行われた。

このように朝鮮前期韓日関係史の研究は、解放後から今日に至るまで多くの研究が行われ、量的・質的に刮目に値する成果を挙げた。そのうち2001年に、1945年から2000年までの研究成果の整理を行ったが、その後、多くの研究結果が出たために、再び整理する必要があると思われる。したがって本

研究では、既存の研究成果を参照し、主に2000年から2007年までの研究成果を整理して、研究の問題点と方向を提示したい。ただし、筆者の能力では多くの論文を短い時間に限られた紙幅で一つ一つ論評することには限界がある。したがっていくつかの主題別に、主要な個別論文の内容を簡略に紹介するにとどめたいと思う。また、紹介の過程で筆者が主要な研究成果を見過ごしたり、論文の論旨を誤って理解した部分があれば、ご寛容の程を願いたい。

## Ⅱ. 韓日関係の概観および外交体制

朝鮮前期韓日関係史を概観した研究は主に李鉉淙、申基碩、河宇鳳によって行われた。しかし、2000年以後から最近まで、それについての研究はない。同時に、時期区分についての研究も、2000年以前の田中健夫、北島万次、有井智徳、河宇鳳、羅鍾宇、韓文鍾らの研究があるのみで、最近ではほとんど研究がなされていない<sup>2</sup>。

一方、外交体制の研究は1960年代の李鉉淙・金柄夏、1990年代の孫承喆・閔德基らによって行われた。特に、孫承喆と閔德基は、朝鮮前期の対日外交は単に朝鮮国王と日本国王(幕府将軍)間で行われた交隣外交体制ではなく、朝鮮国王と幕府将軍は敵礼関係の対等な交隣(敵礼的交隣)を、朝鮮国王と対馬島を中心とする地方豪族とは羈縻関係の交隣(羈縻圈交隣)という、重層的で多面的な外交体制であったと主張した。ただ、両国間の外交関係の成立について、孫承喆は中国の冊封体制を前提に両国関係が成立していたと主張した反面、閔德基は明の冊封体制や華夷秩序とは無関係に両国関係が成立していたとする点で異なる見解を提示している<sup>3</sup>。

これと関連して2007年に閔德基は「冊封体制」論が朝鮮の対日外交上、適用できなかったとする点を明確にするために2篇の論文を発表した<sup>4</sup>。彼はまず「朝鮮前期の『交隣』にみる対外関係」で、朝鮮前期の史料から「交隣」の実際の用例を抽出して整理し、対等関係を志向する交隣を「敵礼的交隣」、上下関係を志向する交隣を「羈縻圈交隣」と規定して、この二つの「交隣」を儒教經典の時代的背景である春秋時代の国際関係にその典型を求めたものと想定した。続いて「朝鮮前期の『日本国王』認識—『敵礼』を中心に」では、朝鮮前期の室町幕府に対する外交を礼的側面に焦点をあてて検討した。また、朝鮮の足利将軍に対する使節派遣の意図は礼によるもので、「敵礼」関係を構築しようとしたものであったことを明らかにし、そのような朝鮮の礼的外交展開がどのような歴史的背景を持っていたのかを検討した。このような研究を通じて、朝鮮前期韓日間の外交体制に対する歴史像がより具体化されう

<sup>2</sup> 時期区分に関する研究史的整理は、韓文鍾1996「朝鮮前期対日外交政策研究—対馬島との関係を中心に—」全北大博士学位論文(한문중1996「조선전기 대일 외교정책 연구—대마도와의 관계를 중심으로—」전북대 박사학위논문)24-27頁を参照。

<sup>3</sup> 韓文鍾、前掲論文(2002)、84-86頁を参照。

<sup>4</sup> 閔德基2007「朝鮮前期の『交隣』にみる対外関係」;「朝鮮前期の『日本国王』認識—『敵礼』を中心に」『前近代東アジア世界の韓日関係』景仁文化社(민덕기2007「조선전기 ‘교린’으로 보는 대외관계」;「조선전기의 ‘일본국왕’ 인식—‘적례’를 중심으로」『전근대 동아시아 세계의 한일관계』경인문화사)。「朝鮮前期の『日本国王』認識—『敵礼』を中心に」は「朝鮮前期の『日本国王』観」『朝鮮學報』132、1989に掲載したものである。

るものと期待する。

一方、韓文鍾は、朝鮮前期韓日関係で対馬島の重要性がとて大きかったという事実に注目して、倭寇対策と対馬島征伐、対馬島の対朝鮮通交と貿易、通交者に対する統制と受職・受図書制などの懐柔策、対馬島に派遣した使行などを分析して、朝鮮前期対日外交の特徴と対馬島の役割について考察を行った<sup>5</sup>。

### Ⅲ.倭人の統制および接待

#### 1.倭人の通交および統制策

朝鮮前期の倭人の通交と統制策についての研究は、これまで李鉉淙、羅鍾宇、韓文鍾らが関心をもって行った。特に韓文鍾は、対日統制策の実施背景と淵源、内容などを考察し、統制策が対日関係にどのような意味を持っていたのかを考察した<sup>6</sup>。彼は、文引に注目して、文引の淵源および適用対象を考察したが、朝鮮では建国のはじめから、明の『大明律』を準用して商人に対する徴税と統制、軍事的な目的、そして朝鮮に入ってくる女真人と倭人に対する統制手段として文引(行状、路引)を利用したとした。そして、戸曹と兵曹・礼曹などの中央官署と、都体察使・巡問使・守令・万戸などの地方官に与えられた文引発行権を対馬島主に与えたことは、対馬島を朝鮮の地方と認識する対馬属州意識ないし対馬藩屏意識の具体的な表現であって、対馬島と羈縻関係の外交体制を維持する重要な要素であったと指摘した。また彼は、1443年、申叔舟によって癸亥約条が締結されたという従来の研究を批判し、約条を締結したのは、対馬島に体察使として派遣されていた李藝であったことを確認した。この文引制度と癸亥約条は対馬島主をはじめとする地方豪族らを羈縻関係の外交体制内に編入させるのに大きく寄与し、以後の対日通交体制の根幹となったとした。今後文引の適用範囲と違反者への処理問題などもあわせて検討する必要がある。

一方、最近では、日本国王使や対馬宗氏、早田氏などの個別通交者についての研究も行われている。2003年に韓文鍾は高麗末と朝鮮初期の万戸職を称した倭人である「倭万戸」に注目して、「倭万戸」の性格と倭寇との関連性を明らかにしようとした<sup>7</sup>。その結果、倭万戸は高麗末と朝鮮初期の倭寇の侵入期に存在しており、特に朝鮮初期の1396年から1420年に集中的に出現するが、1421年前後にその性格が降倭から通交者に変化したと理解した。これとともに「倭万戸」は受職倭人の初期形態で、「倭万戸」が倭寇の頭目もしくは倭寇集団と密接な関連があることを明らかにした。これは倭寇が平和的な通交者に変質していく過程の理解に役立つ。

これまで、偽使問題と関連した韓国国内での研究はほとんどなかった。しかし、日本の歴史教科書問題が台頭し、これに関する問題を論議するために始まった韓日歴史共同委員会の研究成果として

<sup>5</sup> 韓文鍾、前掲論文(1996)を参照。

<sup>6</sup> 韓文鍾、前掲論文(2002)、95-97頁を参照。

<sup>7</sup> 韓文鍾2003「高麗末・朝鮮初の『倭万戸』」『全北史学』26(한문중2003「고려말 조선초의 ‘倭萬戶’」『전북사학』26)。

2005年に『倭寇・偽使問題と韓日関係』が出版され、この本に偽使関連の論文が4篇収録されている<sup>8</sup>。まず、柳在春は朝鮮前期の偽使に関する研究史的検討と偽使の発生背景について検討した。その結果、偽使の発生要因として、朝鮮の倭人統制策に対する管理取締りの問題、通交違反者に対する朝鮮の寛大な措置と地方官の緩み、日本の通交者についての情報の不足と対馬島への依存の問題、日本の幕府の統制力の弱体化と国内情勢の混乱などを指摘した。韓文鍾は「偽使」を研究するための基礎作業の一環として、倭人統制策の実施背景と内容、その違反者の処理などについて考察した。特に、彼は朝鮮政府が偽使を強く取締まることをせず曖昧に処理した理由は、遠くから来た使節を冷遇できないという名分論と、倭寇の再発可能性のためであったとした。また、朝鮮では、通交倭人が持参した書契・図書・文引と進上・回賜の外交儀礼が満たされれば、彼らの真偽は大きな問題としなかったと主張した。そして、偽使が増加した理由は、通交倭人に対する朝鮮の間接統制方式と文引制度の限界、日本国内情勢についての情報不足のためであったと指摘した。一方、彼は「偽使」よりは「通交違反者」という用語を使用することを主張した。

申東珪は偽使に対する研究史を整理する一方で、日本の偽使についての概念は、東アジア国際秩序内での朝鮮の立場を全く考慮しないものであるとして修正すべきだとし、偽使を「名義詐称、架空人物、書契偽造を含め朝鮮の渡航許可の形式を持参していない使節」と暫定的に規定している。彼はまた、偽使に対する朝鮮と日本の観点到違ひがあり、朝鮮では日本国王使が偽使であれ真使であれ、対馬島使とは違ひ、情意と礼儀でもって接待しなければならないという基本的な対日観が定着していたと把握した。

李薫は、琉球国の偽使が集中的にあらわれる15世紀中盤から16世紀中盤までの朝鮮の政治過程や対外政策の変化に重点をおき、偽使派遣を可能にしていた朝鮮の通交条件について簡略に検討した。将来、日本の偽使と琉球の偽使を比較分析すれば、各国の偽使の性格をより明確にすることができるものと期待される。

一方、偽使問題の研究は、韓国より日本で多く行われている。特に1990年代後半、対馬宗家で所蔵されていた偽造図書が大量に発見されたことにより、偽使の研究が本格化した。その結果、偽使の発生背景および実体の研究がかなり進んだ。ただ、最近の日本では偽使の主体を対馬島人とみる長節子説と、対馬＝博多連合説とみる橋本雄説が対立している。これについて橋本雄は長節子説を批判して、1469年から1471年まで、対馬島主宗貞国が博多から出兵しており、これを契機に対馬宗氏と博多商人の間に朝鮮通交貿易権を媒介に密接な連帯関係が生まれたとする。その結果、偽使の派遣主体が対馬島人から対馬島人＝博多商人の連合へと変わってゆき、宗氏が博多商人に新たに付与した通交権がまさしく「偽王城大臣使」であったと主張した<sup>9</sup>。この論文は論争のもととなる要素を有してい

<sup>8</sup> 柳在春「朝鮮前期偽使の発生背景について」；韓文鍾「朝鮮前期倭人統制策と通交違反者の処理」；申東珪『『朝鮮王朝実録』内の日本国王使と偽使』；李薫「琉球国王使と偽使」(유재춘「조선전기 偽使의 발생배경에 대하여」；한문중「조선전기 왜인통제책과 통교위반자의 처리」；신동규『『조선왕조실록』속의 日本國王使와 偽使』；이훈「琉球國王使와 偽使」)以上、韓日関係史研究論文集編纂委員会『倭寇偽使問題と韓日関係』景仁文化社、2005年(한일관계사연구논문집편찬위원회, 2005『왜구 위사문제와 한일관계』경인문화사)。韓文鍾の論文は『日本思想』7(韓国日本思想史学会、2004)に掲載。

<sup>9</sup> 橋本雄「宗貞国の博多出兵と偽使問題—(朝鮮遣使ブーム)論の再構成のために—」(橋本雄「宗貞국의 博多出兵과 偽使問題—(朝鮮遣使 붐)론의 再構成을 위하여—」)、『韓日関係史研究』20韓日関係史学会

るが、偽使の実体が対馬島人＝博多商人の連合という自身の説を補充することで、今後偽使の主体に関する研究と論争が非常に活発に展開される基盤を築いたという点で注目される。

また、佐伯弘次は、朝鮮前期韓日関係を倭寇懐柔策と倭人統制策、『海東諸国紀』の通交倭人の実像について考察し、これを土台として15世紀の韓日関係における対馬島の位置について規定しようとした。また彼は最近、対馬宗氏が秘蔵していた偽造図書と木印が大量に発見され、宗氏による偽使創出の実像が明らかになったことにより、三浦倭乱と壬申約条で朝日関係が縮小され、対馬宗氏による偽使の大量創出と貿易の独占が始まったという既存の研究は修正されなければならないと主張した<sup>10</sup>。

## 2. 向化倭人、受職倭人、受図書倭人

向化倭人と受職倭人、受図書倭人に対する研究は、他の分野にくらべて研究が盛んではない。特に2000年以前までのこの分野の韓国内での研究は3篇に過ぎなかった。これらの研究により、向化倭人の発生背景と待遇、受職・受図書制度の実施背景と変遷過程および彼らの地域的分布、政治・経済的待遇と役割などが、若干ながら明らかにされた<sup>11</sup>。

2001年に朝鮮前期の向化倭人と受職倭人についての研究を集大成した韓文鍾の著書が出版された<sup>12</sup>。彼は、向化・受職倭人が現れた背景は何か、彼らはどのような理由で朝鮮にやって来て暮らすようになったのか、朝鮮政府は彼らをどのように受容し、向化させた後は政治・社会・経済的にどのように待遇したのか、そして朝鮮時代の韓日関係において、向化倭人の役割と意義は何か、彼らの子孫はどのように暮らしていたのか、などを考察した。

まず、「向化倭人の発生背景と類型」において、向化・向化人の概念と範囲を規定し、朝鮮初期向化倭人の発生背景を、高麗末・朝鮮初期の倭寇対策と倭人たちの日本国内における社会経済的な状況と関連づけて検討した。そして、韓国内外の史料から倭人の向化の事例を整理し、向化倭人の類型と特徴および変化過程などを考察した。

「向化倭人に対する政策と処遇」と「向化倭人の役割と影響」では、朝鮮で向化倭人をどのように管理・統制し、彼らに対する政治・社会・経済的な処遇はどのようなものであったのか、そして彼らが朝鮮社会においてどう適応していったのか、ということを検討した。さらに朝鮮と日本の外交関係における向化倭人の役割と影響がどのようなものであったのかを考察した。「日本居住受職倭人」では、日本に居住して朝鮮の官職を受けた受職倭人について検討した。特に、日本居住の受職倭人が登場した背景を、朝鮮の対日政策の変化と関連付けて考察し、さらに受職倭人の時期別・地域別分布と特徴を検討し、これらを通じて朝鮮の向化政策が変化していく過程を把握した。「壬辰倭乱期の降倭」では、壬辰

---

(『조선왕조실록 속의 한국과 일본』경인문화사, 2004(朝鮮王朝実録内の韓国と日本)景仁文化社2004)所収)。

<sup>10</sup> 佐伯弘次「朝鮮前期韓日関係と対馬島」『通信使李藝と韓日関係』セロウンサラムドゥル2006(佐伯弘次「朝鮮前期 韓日關係와 對馬島」『통신사 李藝와 한일 관계』새로운사람들2006)。

<sup>11</sup> 韓文鍾、前掲論文(2002)、97-98頁を参照。

<sup>12</sup> 韓文鍾2001『朝鮮前期向化受職倭人研究』国学資料院(한문중 2001『조선전기 향화 수직왜인 연구』국학자료원)。

倭乱期に日本軍が朝鮮に投降してきた背景と投降時期、朝鮮の降倭誘致とその実態、彼らの処理過程などを検討し、朝鮮において戦争中に降倭をどのように活用したのかを検討した。続いて壬辰倭乱期に朝鮮から官職を授与された降倭の特徴と彼らの活躍についても考察した。最後に「壬辰倭乱以後の降倭と受職倭人」では、壬辰倭乱が終わった後に、朝鮮政府が降倭をどのように処理し、また彼等の生活はどのようであったかを考察した。そして、壬辰倭乱の後に向化倭人が突然断絶してから再び登場し、1636年以降に完全に影をひそめた背景を検討し、これを通じて朝鮮前期と朝鮮後期の両国関係の変化様相を考察した。

以上の研究を通じて、朝鮮時代の倭人の向化と受職、彼らが韓日関係における役割や意味を総合的に理解できた。ただ、向化倭人と受職倭人を通じた両国間の交易と文化交流、相互認識についての有機的かつ総合的な考察がなされていないという限界がある。この問題は、向化倭人と向化女真人との比較研究とともに、将来研究すべき主題だと考えられる。

## IV.三浦と韓日関係

### 1.三浦と倭館

朝鮮前期の倭館は、上京倭人の客館である東平館と三浦の倭館、そして私貿易の廃止に伴い短い期間ではあったが貿易の場所としての役割を果たした倭物庫がある。倭館についての研究は、日本では中村栄孝、金義煥、村井章介らによって活発に行われているのに比べ、韓国内の研究では李鉉淙、金龍基、孫承喆の論文3篇しかない。李鉉淙は倭館の設置沿革を、金龍基は倭物庫の起源と位置および交易の実態、存廃過程を、孫承喆は朝鮮前期に倭人のソウルでの滞在場所である東平館での接待および交易の実態を簡略に考察した。一方、李鉉淙は三浦恒居倭人と釣魚倭人に対する収税論が登場する背景と収税論の議論過程および実行の有無などを考察して、恒居倭の土地に対する収税は議論にとどまり、釣魚倭船への収税だけが実行されたとした<sup>13</sup>。

2000年以降の倭館研究は2篇に過ぎない。まず孫承喆は、これまでの韓国と日本での三浦地域に関する研究現況および関連史料、塩浦の開港と閉鎖などについて考察した。また、今後の三浦研究の課題として、三浦の開港背景および始点、三浦の機能と運営、三浦倭人の生活と朝鮮人との関係、三浦の変化と保存実態、三浦関連資料のデータベース構築の推進などを提示した<sup>14</sup>。張舜順は朝鮮前期倭館の設置と種類および機能について考察し、浦所倭館の単一化過程が、朝鮮の対日統制政策と密接な関連があることを確認した<sup>15</sup>。特に彼女は、倭館の起源を高麗時代の金州(金海)にあった「金海倭館」とし、朝鮮時代の倭館の起源は1409年の東平館の建立と考えるべきだと主張している。ま

<sup>13</sup> 韓文鍾、前掲論文(2002)、98-99頁を参照。

<sup>14</sup> 孫承喆2006「朝鮮前期韓日関係と塩浦研究」『通信使李藝と韓日関係』セロウンサラムドゥル(손승철, 2006「조선전기 한일관계와 염포연구」)『통신사 李藝와 한일관계』새로운사람들)。

<sup>15</sup> 張舜順2001「朝鮮前期倭館の成立と朝・日外交の特質」『韓日関係史研究』15韓日関係史学会(장순순, 2001「조선전기 왜관의 성립과 조·일 외교의 특질」『한일관계사연구』15한일관계사학회)。

た、浦所倭館には、朝鮮後期とは違い、倭人の恒久的な定着村である倭里が存在していたという事実を強調した。

将来、三浦に関する研究は、三浦の設置時期と景観、三浦における倭人の生活、朝鮮人との交流、三浦恒居倭人の耕作地に対する収税問題と禁断権の問題に拡大されれば、朝鮮前期倭館の具体的な実像を理解できるだろう。

## 2. 三浦倭乱とそれ以後の韓日関係

三浦倭乱は朝鮮前期の韓日関係を理解する上で重要な主題の一つである。これは三浦倭乱を契機として偽使が増加し、両国関係が急激に衰退して、遂には壬辰倭乱という大戦乱を迎えることになったためである。三浦倭乱に関する研究は韓国内より日本で多くなされた。一方、韓国内での研究は1960年代初めの李鉉淙の論文3篇と、最近の李在範の論文がある。また、三浦倭乱以後の韓日関係について、金柄夏と鄭暎錫は、明宗10年(1555年)全羅道達梁と済州地方に侵入して略奪を働いた事件である乙卯倭変を考察した<sup>16</sup>。

これらの研究は、三浦倭乱の発生原因と結果とそれ以後の外交関係の断絶・復旧についてある程度明らかにしているが、後期倭寇の侵入とその対策、偽使問題についての研究はほとんどなされず、この時期の韓日関係を眺望するには限界があった。ただ2006年に「後期倭寇」と関連して尹誠翊の論文1篇があるのみである<sup>17</sup>。彼は乙卯倭変を起こした集団は「五峯(王直の号)」が率いる中国人と日本の九州西北部地域の人が中心だったと把握し、彼らを中国大陸で活動していた「後期倭寇」と同類型と理解した。その結果、乙卯倭変は従来の倭寇や倭変、倭乱などと比べた時、事件の性格や中心勢力が全く異なるとした。

これまでの研究で、三浦倭乱の発生原因と経過とそれ以後の外交関係の断絶・復旧についてはある程度明らかになった。しかし、後期倭寇の侵入とその対策、偽使問題に関する研究、三浦倭乱以後から壬辰倭乱前までの韓日関係に関する研究はほとんどない。今後これについての本格的な研究がなされることを期待する。

## V. 交易

朝鮮前期の対日貿易に関する研究は、1960年代に李鉉淙と金柄夏によって主導された。李鉉淙は対日貿易に関する論文を最初に発表したのであるが、李鉉淙の研究を体系化したのが金柄夏であるといえる。彼は韓国内外で発表した論文5篇に新稿3篇を加えて、1969年に『李朝前期対日貿易研究』(韓国研究院、1969年)という研究書を刊行した。この本は朝鮮前期の韓日間貿易に関する唯一の著述であるだけでなく、以後の対日貿易史研究の指針となるほど、後学に多大な影響を与えたといえる。

<sup>16</sup> 韓文鍾、前掲論文(2002)、100-101頁を参照。

<sup>17</sup> 尹誠翊2006『『後期倭寇』としての乙卯倭変』『韓日関係史研究』24韓日関係史学会(윤성익2006「후기 왜구」로서의 乙卯倭變』『한일관계사연구』24한일관계사학회)。



その後、朝鮮前期の対日貿易に関する直接的な研究はほとんどなく、ただ、朝鮮前期の対日関係に言及しながら簡略に貿易関係を整理したり、対日貿易についての既存研究を整理した、李鉉淙・河宇鳳・金東哲・李正守の論文がある<sup>18</sup>。

2000年以後の韓日間交易の研究は、鄭成一と鄭智蓮の論文2篇ととも少ない。特にこの分野の研究は、他の分野に比べて活発に研究されていない。その理由は、この分野の研究者が多くないという点と、関連史料が他の時期に比べて多くないためであると考えられる。

韓日間の経済交流史の重要なテーマの一つは、両国間の貨幣流通である。これに関連して、鄭成一は15世紀から17世紀までの朝鮮の銅銭と日本の銀貨の流通を考察した。その結果、16世紀初めまでは朝鮮の銅銭が日本に流出したが、16世紀中盤からは日本の銀が朝鮮に流入しはじめ、17世紀中盤以降の50数年間、日本銀貨の朝鮮流入がピークを迎えたが、18世紀から徳川幕府の銀貨に対する統制により、銀貨の流出が統制されることで衰退しはじめたと主張した。特に、16世紀中盤以降、日本の銀が朝鮮に流入した理由を、日本の銀鋳開発と銀精錬技術の発展による銀供給の増大で、朝鮮と日本の銀の相対価格に違いがあったためであると理解した<sup>19</sup>。特に、鄭成一は貨幣の移動を東アジアという巨視的・世界史的観点から理解すべきであると主張した。だが、貨幣の流通を研究するのであれば、韓・中・日の貨幣単位と価値の違いをより明白にする必要がある。

朝鮮前期対日関係史において、朝日間の貿易は他の分野に比べてあまり多く研究されていない。これに対し鄭智蓮は太祖代から成宗代に至る対日貿易の展開過程の中で、支持・運送・密貿易の弊害が累積すると、それに対する解決策として私貿易を許容、廃止する貿易形態の変化過程を考察した<sup>20</sup>。特に15世紀末には、朝日貿易は公貿易より私貿易に偏重しはじめたが、これは公貿易に比べ、価格変動が相対的に激しかった私貿易の不安定な経済的利潤が不満要素となり、朝日間の貿易摩擦をもたらしたと主張した。

以上見てきたように、朝鮮前期朝日間の貿易の研究は、主に制度史的な面からの研究のみが行われてきた。一方、対日貿易の規模と物品の流通過程、日本との交易が朝鮮の経済社会に及ぼした影響などの検討は、ほとんどなされてこなかった。したがって、今後はこれらに関する研究が行われなければならないのと同時に、朝日貿易は単に朝鮮と日本との貿易ではなく、東アジア国家との相互関連性のなかで理解する必要があると考える。

<sup>18</sup> 韓文鍾、前掲論文(2002)、102-103頁を参照。

<sup>19</sup> 鄭成一2004「朝鮮の銅銭と日本の銀貨；貨幣の流通を通じてみた15-17世紀の韓日関係」『韓日関係史研究』20、韓日関係史学会。『朝鮮王朝実録内の韓国と日本』景仁文化社・2004年に所収。(정성일2004「조선의 동전과 일본의 은화; 화폐의 유통을 통해 본 15-17세기의 한일관계」『한일관계사연구』20한일관계사학회(『조선왕조실록 속의 한국과 일본』경인문화사2004)。

<sup>20</sup> 鄭智蓮2006「朝鮮前期対日私貿易研究」『韓日関係史研究』24韓日関係史学会(정지연2006「조선전기 대일 사무역 연구」『한일관계사연구』24한일관계사학회)。

## VI.使節の往来と文化交流、相互認識

この分野の研究は2000年以前まで26篇であった。しかし、2000年以後から急激に増加して、2007年までの8年間で実に22篇に及んだ。このように急増した理由は、李藝と申叔舟といった朝鮮前期対日外交家への再評価作業が活発に行われたためである。特に、李藝に関する研究は2005年2月に文化観光部が、「今月の文化人物」に李藝を選定したことを契機に非常に活発に行われた。一方、文化交流と相互認識の研究は、1990年以降に集中的に行われた。

### 1.使節の往来

両国間の使節の往来に関する研究は、李鉉淙と韓文鍾の論文3篇がある。これらの研究を通じて、対日使節の派遣目的と構成、派遣地域、往還路、使節の種別および性格、使節の往来による影響などについてかなりの研究が進んだ。韓文鍾は朝鮮前期対日使節の派遣実態を各王代別、名称別に概観して、対馬島に派遣した使行(通信官・回礼使・報聘使・賜物管押使・体察使・敬差官、致奠致慰官、宣慰使(官)、垂問使)の種類と淵源、任務と役割などを分析して、朝鮮と対馬島間の外交関係がどのように形成・展開されたのかを考察した。また、彼は朝鮮から対馬に派遣した使節の一つである対馬島敬差官に注目して、敬差官の起源および名称、派遣と構成、任務および役割の分析を通じて、朝鮮初期の対地方使臣であった敬差官を対馬島に派遣していたという事実は、朝鮮が対馬島を自国の領土と認識し、朝鮮の外交秩序内に編入させようとしていたことを意味するものと解釈した<sup>21</sup>。

このように主に朝鮮から日本に派遣された使節に関する研究が中心であったが、2004年に幕府将軍が朝鮮国王に派遣した使節である日本国王使の研究が現れた。韓文鍾は朝鮮前期日本の幕府将軍が朝鮮国王に派遣した使節である日本国王使70回の通交推移と通交目的、そして国王使の変質と偽使問題を考察して、これを通じて日本国王使の実体を明らかにしようとした<sup>22</sup>。

一方、孫承喆は朝鮮時代の「通信使」の概念と名称の検討を通じて「朝鮮通信使」という名称は、日本人の研究成果を無批判に受け入れた結果であるとして、これに対する再検討の必要性を提起した<sup>23</sup>。

### 2.被擄・漂流民の送還

被擄人と漂流民の送還は、両国関係を形成・維持する重要な手段の一つだった。これに関する日本での研究は石原道博らの論文があるが、韓国内では1970年代に孫弘烈によって始められた<sup>24</sup>。その後、研究がほとんどなかったが、地域と地域間の交流に関心が集まる中、2000年代から、漂流民の送

<sup>21</sup> 韓文鍾、前掲論文(2002)、104頁を参照。

<sup>22</sup> 韓文鍾2004「朝鮮前期日本国王使の朝鮮通交」『韓日関係史研究』21(한문중2004「조선전기 日本國王使의 朝鮮通交」『韓日關係史研究』21)。

<sup>23</sup> 孫承喆2003「朝鮮時代『通信使』概念の検討」『朝鮮時代史研究』27(손승철2003「조선시대 ‘통신사’ 개념의 검토」『조선시대사연구』27)。

<sup>24</sup> 韓文鍾、前掲論文(2002)、105-106頁を参照。

還に関する研究が李薫と孫承喆によって本格化した<sup>25</sup>。李薫は、漂流・漂着に対する朝鮮の認識と朝・日間の漂流送還の実態および送還儀礼などを検討した。その結果、朝鮮(朝鮮政府)が沿岸地域の戸口確保と倭寇問題と関連させて、漂流・漂着問題に対応していたことを明らかにし、朝鮮・日本間の漂流民送還は、朝鮮と明の間の外交関係と無関係ではないために、結果的に朝鮮人漂流民の送還は、15世紀中葉に、そして日本人漂流民の送還は16世紀中葉に至って初めて安定しはじめたと指摘した。特に、李薫の研究は、朝鮮前期ばかりでなく、朝鮮後期漂流・漂着と漂流民の送還問題を、韓国史的な側面から本格的に扱った点で大きな意義があるといえる。一方、孫承喆は、朝鮮前期東アジア国家間で行われた被擄・漂流人の送還が、朝鮮の事大・交隣政策と密接な関連があるという点に注目して、朝鮮の被擄人と漂流人の送還が、事大・交隣政策とどのような相関関係の中で行われ、それが東アジア国際関係ないし国際秩序の中でどう位置づけていくかを考察した。

### 3.文化交流

日本の大蔵経求請に関する研究は、1930年代から今村軻、川口卯橘、堀池春峰、村井章介らの日本の研究者によって活発に行われた。一方で、韓国国内における研究は1960年代に3篇、1980年代に1篇、1990年代に2篇が発表された<sup>26</sup>。これらの研究を通じて、大蔵経の求請と賜給、日本に残っている大蔵経の数量などについてかなり明らかにされたと思われる。しかし、これらの研究は、史料に対する基礎調査をおろそかにし、大蔵経の求請と賜給実態についての正確な資料を提示できなかった。また、大蔵経の賜給と朝鮮の対仏教政策、日本からの大蔵経求請理由および大蔵経が持つ意義なども検討しなければならないと考える。

2000年代に入って、日本の大蔵経求請と関連した2篇の論文が発表された。まず、韓文鍾は、朝鮮前期韓日間の外交関係を通じて行われた文化交流の諸様相を、特に大蔵経、梵鐘、仏事の助縁要請などの仏教文化を中心に考察した<sup>27</sup>。特に彼は、『朝鮮王朝実録』などの史料から大蔵経の求請および賜給事例、仏事の助縁要請事例、梵鐘など仏具の求請事例などを集めて、表に整理した。その結果、大蔵経、梵鐘をはじめとする朝鮮の仏教文化が韓日間の友好的な外交関係を維持するのに重要な役割を果たし、これは日本の仏教文化と出版文化の発展に大きく寄与したと主張した。そのほかにも、木綿の栽培技術と鉛銀分離技術、水墨画の伝播など、韓日間の文物交流も考察した。

須田牧子は、これまで、大蔵経の求請と賜給に限定されていた研究主題を、大蔵経を含む朝鮮からの輸入仏具類が、現実的に日本の中世社会にどのように受容され機能していたのかを検討した。その結果、京都の寺院の間で大蔵経が賃借されており、法会の場で儀礼的に利用されていたことを考察し

<sup>25</sup> 李薫2000「朝鮮前期漂流・漂着に対する朝鮮の認識と漂流民送還」『朝鮮後期漂流民と韓日関係』国学資料院(李薫2000「朝鮮前期 漂流・漂着에 대한 조선의 인식과 漂流民送還」『朝鮮後期 漂流民과 韓日關係』국학자료원)。李薫2001「朝鮮前期朝・日間の漂流民送還と交隣」；孫承喆「朝鮮前期被擄・漂流民送還と東アジア国際秩序」(이훈2001「조선전기 조·일간의 표류민송환과 교린」；손승철「조선전기 피로·표류민송환과 동아시아 국제질서」)以上『朝鮮時代韓日漂流民研究』国学資料院(『선시대 한일표류민 연구』국학자료원)。

<sup>26</sup> 韓文鍾、前掲論文(2002)、106-108頁を参照。

<sup>27</sup> 韓文鍾2002「朝鮮前期日本の大蔵経求請と韓日間の文化交流」『韓日関係史研究』17韓日関係史学会(한문중2002「조선전기 일본의 대장경구청과 한일간의 문화교류」『한일관계사연구』17한일관계사학회)。

た。また、政治権力によって、輸入された大藏經がどんな契機により重視され、どのように使用されていたのかを、大内氏の大藏經輸入事例を中心に考察した。そして15世紀前半には、大内氏の領国支配上の必要性のために、領内の寺院に大藏經を備えていたが、15世紀後半には、大藏經を集積している、その入手が可能であるという事実を、日本畿内の諸勢力に知らせようとする「別の目的」が目立って表われていると主張した<sup>28</sup>。この研究を契機として、日本社会での大藏經の受容と利用の実相を理解する端緒となるものと期待される。

#### 4. 相互認識・人物

2000年代に入って、特に対日外交専門家である李藝と申叔舟の研究が非常に活発に行われた。まず韓文鍾と池斗煥は、朝鮮初期第一の対日外交専門家といえる李藝という人物に注目してその活動を分析し、彼の活動が対日関係において持つ意味を把握しようとした<sup>29</sup>。特に韓文鍾の研究は、李藝に関する最初の研究論文で、以後、李藝研究の活性化に大きく寄与した。一方、李明勲は、李藝に関する既存の研究論文2篇と、李藝の生涯と業績を簡略に整理して2005年に『李藝の使命—私は朝鮮の通信使である—』を編纂した<sup>30</sup>。このような研究成果を基盤に、韓国の文化観光部は李藝を2005年2月に「今月の文化人物」に選定した。

李藝が2005年2月に文化人物に選定されたことを契機に、韓日関係史学会では李藝の業績に再び光をあてるための国際学術シンポジウムを開催した。その時の学術大会で発表された論文を修正・補完して2006年に『通信使李藝と韓日関係』という研究書が出版された<sup>31</sup>。このうち、河宇鳳は李藝の日本認識の内容と特性を考察した。そうして、李藝は主に日本の政治・経済・軍事的な側面に関心を持ち、実用的に日本の文物を認識し、対馬島や日本に対して少しも民族的な特性を強調したり区分した

<sup>28</sup> 須田牧子2004「15世紀日本の朝鮮仏画輸入とその意義—大内氏の大藏經輸入を中心に—」『韓日関係史研究』20韓日関係史学会(須田牧子2004「15세기 일본의 朝鮮佛畫 수입과 그 의의—大内氏의 大藏經 수입을 중심으로—」『한일관계사연구』20한일관계사학회)。

<sup>29</sup> 韓文鍾1989「朝鮮初期李藝の対日交渉活動について」『全北史学』11・12合集(韓文鍾1989「朝鮮初期 李藝의 對日交渉 活動에 대하여」『全北史學』11・12합집)。池斗煥1992「世宗代対日政策と李藝の対日活動」『韓国文化研究』5釜山大韓国文化研究所(池斗煥1992「世宗代 對日政策과 李藝의 對日活動」『한국문화연구』5부산대 한국문화연구소)。

<sup>30</sup> 李明勲「朝日文化の交流の先駆者:通信使李藝の生涯と業績」;韓文鍾「朝鮮初期李藝の対日交渉活動について」;池斗煥「世宗代対日政策と李藝の対日活動」(이명훈「朝日 문화의 교류의 선구자 :통신사 李藝의 생애와 업적」;한문중「조선조기 李藝의 대일교섭 활동에 대하여」;지두환「세종대 대일정책과 李藝의 대일활동」)以上は李明勲編2005『李藝の使命—私は朝鮮の通信使である—』セロウンサラムドゥル、ソウル(이명훈편2005『李藝의 使命—나는 조선의 통신사로소이다—』새로운사람들, 서울)。上の論文中、韓文鍾の論文は『全北史学』11・12(1989)に掲載された論文、池斗煥の論文は『韓国文化研究』5(1991)を一部修正したものである。

<sup>31</sup> 李元淳「交渉史研究の新たな地平線」;永留久恵「李藝が通信使として活動した時代の対馬」;河宇鳳「李藝の日本認識」;中田稔「『鶴坡先生実記』の構成および編纂過程」;韓文鍾「世宗代李藝の対日交渉活動」;李明勲「世宗代の対日通信使李藝」;孫承喆「朝鮮前期韓日関係と塩浦研究」;佐伯弘次「朝鮮前期韓日関係と対馬」(이원순「교섭사 연구의 새 지평선」;나가도메 히사에「李藝가 통신사로 활동하던 시대의 對馬」;하우봉「이예의 일본인식」;나카타 미노루「『鶴坡先生實記』의 구성 및 편찬과정」;한문중「세종대 李藝의 대일교섭 활동」;이명훈「세종대의 대일통신사 李藝」;손승철「조선전기 한일관계와 염포연구」;사에키 코우지(佐伯弘次)「朝鮮前期 韓日關係와 對馬島」)以上、韓日關係史学会編2006『通信使李藝と韓日關係』セロウンサラムドゥル(한일관계사학회편2006『통신사 李藝와 한일관계』새로운사람들)。

りしないという特徴があったと指摘した。一方、中田稔は李藝の『鶴坡先生実記』の構成および編纂過程、史料的价值を総合的に検討した。特に彼は、『鶴坡先生実記』『海外日記』は一次史料として利用するには慎重を期さねばならないという点を強調した。韓文鍾は、世宗代の李藝の対日交渉活動に関する分析を通じて、李藝は多くの対日使行の経験をもとに朝鮮の強力な倭人統制策といえる文引制度と癸亥約条を定訳するのに主導的な役割を担っていたなど、朝鮮の倭人統制策を確立するのに大きく寄与した人物として位置付けた。一方、李明勲は、いくつかの史書に記録された李藝関連の資料を分析して、李藝という人物の人間像を多角的に検討した。

一方、2007年11月には、韓日関係史学会が中心になって、「蔚山と忠肅公李藝」という主題で学術シンポジウムを開催した。そして、ここで発表された論文を『韓日関係史研究』28集に特集として掲載した<sup>32</sup>。まず、李鍾書は、高麗の郷吏家門が吏族と士族に分化するように、蔚山の土姓である鶴城李氏が、吏族と士族に分化していく過程を考察した。その結果、李藝の息子のうち、李宗根の子孫は郷吏職を担い、李宗実の後孫は士族となった。その後、李宗根の子孫は壬辰倭乱後に郷吏職を免じられたが、1700年代中盤まで、一部の家門は郷吏を務めた。そして次第に郷吏が賤視されると、郷吏職をやめたものと理解した。この論文は、蔚山の地域社会を率いていた鶴城李氏の過去の歴史を再認識させ、蔚山地域史研究を進展させる契機となるものと期待される。一方、이현호(イ・ヒョノ)は、朝鮮初期対日関係における李藝という人物を、歴史教育の現場で具体的にどのようにイメージさせればよいのかについて検討し、授業案を作成してこれを実際の教育現場に適用した結果を発表した。将来、このような研究が活性化し、地方化時代に郷土史教育の重要性がもう一度浮き彫りにされると期待される。李明勲は『朝鮮王朝実録』に記録された蔚山人を整理したが、特に李藝の子孫である李宗実・李謙受について考察した。韓文鍾は、朝鮮初期の向化倭人の発生背景と類型、彼らに対する政治・経済・社会的な待遇について検討し、続いて『成宗実録』6年6月辛巳条の李藝が向化倭人であるという記録について史料的批判を通じて、それが誤った記録であるという事実を明らかにした。

このように、朝鮮初期対日外交家であった李藝に関する研究が2005年から活発に行われた。今後、歴史の中に埋もれていた人物を発掘して、朝鮮前期韓日関係史に対する研究の幅をさらに広げることができると期待される。これはまた、朝鮮前期韓日関係史研究が地域史の発掘と保存を通じた蔚山地域の歴史的アイデンティティの確立においても見本となるであろう。

一方、申叔舟とその著書である『海東諸国紀』の研究は、1980年代に趙英彬、鄭杜熙、朴慶嬉により始められ、本格的な研究は河宇鳳によって行われた。特に河宇鳳は、朝鮮初期対日使行員である李藝、宋希璟、申叔舟らが残した復命記録と使行録の分析を通して、朝鮮初期の知識人ないし支配層の対日認識を考察した。その結果、この三人の対日認識の共通点は、儒教的な名分論に立脚しない実用的な観点から日本の文物を認識し、日本という国家や民族については「夷狄観」をあらわにした

<sup>32</sup> 李鍾書「高麗～朝鮮前期鶴城李氏の地域内の位相と役割」; 이현호(イ・ヒョノ)「朝鮮初期対日関係と通信使に関する歴史教育方案—李藝を中心に—」;李明勲「朝鮮王朝実録の蔚山人」;韓文鍾「朝鮮初期の向化倭人と李藝」(이종서「고려～조선전기 鶴城李氏の 지역 내의 위상과 역할」;이현호「조선 초기 대일관계와 통신사에 대한 역사교육 방안—李藝를 중심으로—」;이명훈「조선왕조실록의 울산인(蔚山人)」;한문중「조선초기의 向化倭인과 李藝」)以上は『韓日関係史研究』28韓日関係史学会2007,12『한일관계사연구』28한일관계사학회2007, 12)。

が、日本人個人については肯定的で友好的な認識を持っていたとした。他方で、彼らの差異点は、李藝と宋希璟は天皇についての言及が全くないが、申叔舟は天皇について本格的に認識しており、日本夷狄観においても、宋希璟はかなり主観的であり、当時の実際の状況とかけ離れているのに比べて、申叔舟は体系化され深化された様相を示しているとした<sup>33</sup>。

これ以降、2007年に申叔舟の『海東諸国紀』に関する統合的な研究がなされた<sup>34</sup>。「東アジア世界と『海東諸国紀』」という主題の国際学術大会において発表された論文5篇が『韓日關係史研究』27集(2007)に特集として収録されている。まず、孫承喆は朝鮮前期韓日關係や東アジア海域史を研究するうえで基本史料である『海東諸国紀』の史料的价值を簡略に概括した。柳在春は『海東諸国紀』の三浦地図に表示されている三浦地域の軍事防禦について考察した。彼は浦口を直接統制する営庁と背後の鎮城、そして周辺の水軍鎮が有機的連携を持ち、倭船の停泊を包囲していたとする。特に齊浦の場合は、防禦のための背後の地域に新たな鎮を設け、さらに独立の県を設置して運営し、釜山浦の場合は東平鎮を運営し、蔚山には左兵營を置いた。このような布置は基本的に犄角構造を重視した伝統的な防禦体系であったと主張した。彼はまた、三浦地図を通じて倭人居留地と一般住民居留地を相互に隔離しようという意図から、齊浦には土城、塩浦には城壁を築造して遮断しており、釜山浦は遮断施設はみえないが、営庁—梁直—東平鎮がラインを形成して、内陸地との連結を遮断していたと主張した。沈保京は『海東諸国紀』に反映された地名表記法の特徴を考察し、続いて『海東諸国紀』「対馬島之図」と本文の対馬島の地名を対照し、『海東諸国紀』の地名に反映された日本地名の表記音が、大部分そのまま、現在の日本の地名に反映されていることを確認した。嚴燦鎬は、『海東諸国紀』の歴史地理的考察を通じて『海東諸国紀』は朝鮮前期の日本と琉球との関係、これらの国に対する地理的認識と風俗などを知る貴重な資料であることを強調した。申東珪は、『海東諸国紀』に収録された日本国王観と日本国王使の変化を通じて、日本国王使の性格を明らかにした。すなわち、日本での国王の権力体制が古代天皇制社会から中世武家社会に転換する時点で使用されたものとして、国王の意味は対外的・対内的な二面性を帯びており、このことは日本の外交的二面性を示すものであると規定した。また、1471年の『海東諸国紀』編纂前後に、日本国王使の性格が変化して、表面的な国家間の公式的な関係の交隣と、実利追求という二面性を持ち、国王使を詐称する偽使が発生したものと規定した。これと関連して、日本国王使の認識と対日外交体制に関する研究がより活性化するものと期待される。

一方、朝鮮と日本との相互認識に関する研究は、1990年代に入って河宇鳳、孫承喆、羅鐘宇、金泰俊、安柄周、이채연(イ・チェヨン)、小幡倫裕、村井章介らが関心を持ち始めた<sup>35</sup>。その結果、対

<sup>33</sup> 韓文鍾、前掲論文(2002)、109頁を参照。

<sup>34</sup> 孫承喆「『海東諸国紀』の史料的价值」；柳在春「『海東諸国紀』の中の三浦を中心とする軍事防禦について」；嚴燦鎬「『海東諸国紀』の歴史地理的考察」；申東珪「『海東諸国紀』にみる中世日本の国王観と日本国王使の性格」；沈保京「『海東諸国紀』の地名に反映された韓日中世語の表記法」(孫承喆「『海東諸国紀』의 사료적 가치」；柳在春「『海東諸国紀』속의 三浦를 중심으로 한 군사방어에 대하여」；嚴燦鎬「『海東諸国紀』의 역사지리적 고찰」；申東珪「『海東諸国紀』로 본 中世日本の 國王觀과 日本國王使의 성격」；심보경「『海東諸国紀』의 지명에 반영된 한일 중세어 표기법」)以上は『韓日關係史研究』27韓日關係史学会 2007(『한일관계사연구』27한일관계사학회 2007)。

<sup>35</sup> 韓文鍾、前掲論文(2002)、108-114頁を参照。

日使行員の日本認識、朝鮮人の天皇観、韓日両国人の相互認識の変化過程、使行員の文学作品からみた日本認識などに関する研究が多く進められた。特に、相互認識の研究は、他の研究よりも非常に活発に行われた。しかし、2000年以後には相互認識に関する研究は河宇鳳の論文1篇しかない<sup>36</sup>。彼は朝鮮前期対外関係に表われた自我認識と他者認識を考察した。朝鮮前期に確立した小中華意識は、基本的に自民族中心主義の性格を持っており、華夷観には他者化だけではなく包容の論理も内包されていて、朝鮮政府が向化人政策を積極的に展開したとする。そして、15世紀の世界認識と政策は、華夷観を土台としてはいても、現実性と融通性があったが、16世紀に入ると、対外関係と認識が消極化し、硬直化するという変化が表われたものと理解した。そして、朝鮮時代韓国人の世界認識および自我認識として提示された小中華認識と朝鮮中華主義論は、いずれも文化主義的華夷観に基盤を置いており、その内容は中華主義的華夷観の枠内に朝鮮を代入したものであると整理した。

## 5.教科書問題

2000年代から日本の歴史教科書問題が韓日間の外交懸案として浮上すると、これに関連する研究が行われた。特に孫承喆は、日本の教科書問題と関連した論文3篇を集中的に発表した。まず彼は、日本で使用されている中・高歴史教科書と概説書、歴史事典に記述された、中近世の韓日関係史関連の内容を総体的に検討し、韓国関連の記述、特に倭寇、壬辰倭乱、通信使関連の記述の問題点とそれに対する韓国側の研究成果を紹介して、日本の歴史教科書の記述を改善するための基礎資料を提供しようとした<sup>37</sup>。また彼は、日本で2002年から使用されている「中学校歴史教科書」と2003年から使用されている「高等学校歴史教科書」の韓国関連の記述のうち、特に高麗、朝鮮時代の部分を学術的側面から分析し、その対応策を模索しようとした<sup>38</sup>。その結果、倭寇、朝鮮国号、壬辰倭乱、通信使、倭館関連部分に問題があることを指摘した。そして、争点部分をより客観的かつ学問的に研究し、その結果が日本において歴史教科書執筆に反映されるように戦略的で多角的な対応策の模索が必要であるという点を強調した。続いて彼は、現在、韓日両国で一般人または大学生が知っている韓国史または日本史の事典類(3種類ずつ)および概説書(4種類ずつ)に、高麗・朝鮮前期韓日関係史がどのように叙述されているのかを比較・分析した<sup>39</sup>。その結果、麗蒙連合軍の日本侵攻と倭寇、朝鮮前期の通交部分の中で、特に倭寇の構成問題について多くの差異があることを確認した。彼は、望ましい韓日関係史叙述のために、韓日関係史が事件中心ではなく、通時的な叙述とならねばならないという点

<sup>36</sup> 河宇鳳2003「朝鮮前期対外関係に表われた自我認識と他者認識」『韓国史研究』123(하우봉2003「조선전기 대외관계에 나타난 自我認識과 他者認識」『한국사연구』123)。

<sup>37</sup> 孫承喆「日本歴史書の中・近世韓日関係史に対する歪曲実像」韓日関係史研究論文集編纂委員会2005『倭寇偽使問題と韓日関係』景仁文化社(손승철「일본 역사서의 중·근세 한일관계사에 대한 왜곡실상」(한일관계사연구논문집편찬위원회2005『왜구 위사문제와 한일관계』경인문화사)。

<sup>38</sup> 孫承喆2003「日本歴史教科書高麗・朝鮮時代記述の歪曲実態分析」『韓日関係史研究』19韓日関係史学会(손승철2003「일본 역사교과서 고려·조선시대 기술의 왜곡실태 분석」『한일관계사연구』19한일관계사학회)。

<sup>39</sup> 孫承喆2006「高麗・朝鮮前期韓日関係史記述の共通点と差異点」『韓日関係史研究』25韓日関係史学会(손승철2006「고려 조선전기 한일관계사 기술의 공통점과 차이점」『한일관계사연구』25한일관계사학회)。

と、両国の平和的な関係に対する基本的な歴史事実に忠実にならなければならないという点、一国史的で一方的な叙述を脱し、客観化していく叙述が必要で、両国関係史を正確に理解している専門家が執筆しなければならないという点を提案している。

## 6.その他

最近になって、国家資源と国家安保への関心が増加する中、海洋と海洋交流の研究が始められた。これに関連して釜慶大学校海洋文化研究所で大韓海峡をはさんでいる対馬島との関係を扱った「韓国海洋史研究叢書」の『朝鮮前期海洋開拓と対馬島』が刊行された。この本には、朝鮮前期の対馬島との交流および交易、海洋防禦などに関する論文8篇が収録されている<sup>40</sup>。まず、申明鎬は、朝鮮で実施された「空島政策」という用語が、高麗末・朝鮮初の倭寇の侵略性や略奪性を縮小ないし希釈させるという点において歪曲された用語だったと指摘して、空島政策という用語のために歪曲された朝鮮時代の海洋政策および海洋開拓の実状を簡略に考察した。李根雨は対馬島の地理と歴史を既存の研究成果をもとに簡略に整理した。최영하(チェ・ヨンハ)は朝鮮前期の南海岸の漁場と魚種、そして対外関係に表われた倭人の操業と彼らの漁獲した魚種について考察した。김기훈(キム・ギフン)は、朝鮮前期倭人に許可されていた漁場を中心に、これらの漁場が許諾されることで、朝鮮水軍の海洋防禦体制がどのように変化していったのかを検討した。その結果、朝鮮初期南海岸の防禦中心地は、慶尚右道の巨濟県であったとした。しかし、倭人に孤草島釣魚が許可されることで、朝鮮水軍の防禦体制に変化が起き、巨濟県とともに興陽県と珍島郡が南海岸を守る中心拠点に成長した。そして、朝鮮水軍はこうした防禦拠点を中心に釣魚倭人の航路離脱の有無を監視しながら、いつ発生するかも分からない倭変に対処していたと主張した。韓任善はこれまで、対馬島との関連であり関心が持たれていなかった塩に注目し、朝鮮の塩業発展が対馬島倭人にどのような影響を及ぼしていたのかを検討した。そして、朝鮮初期の塩産業は、高麗末に比べて飛躍的に発展しており、朝鮮沿岸の民が塩業に従事する比率が増加するに従い、魚塩販売で利益をあげた対馬島倭人は、彼らの貿易に大きな打撃を被ることになったと主張した。沈玟廷は対馬島人の魚塩生産と販売様相を考察し、朝鮮での塩生産が、興利倭人を通じて魚塩獲得をせずともよい程度に増加するのにしたが、三浦倭乱以後には対馬島人を中心とした一魚塩交易は縮小し、徐々に消えていったと言う。一方、金文基は、嘉靖年間(1522～1566)の倭寇を契機に形成された海防論が江南社会に及ぼした影響を考察した。

これを契機に、これまで度外視されてきた漁民や海民などの海洋生活と関連する研究がより活性化されるものと期待される。

<sup>40</sup> 申明鎬「朝鮮前期海洋開拓と漁場開放」; 최영하(チェ・ヨンハ)「朝鮮前期南海岸の漁場と魚種」; 韓任善「朝鮮初期塩業発展と対馬倭人」; 김기훈(キム・ギフン)「朝鮮前期南海岸釣魚倭人と海洋防禦」; 金文基「嘉靖年間の倭寇と江南海防論」; 李根雨「対馬島の地理と歴史」; 沈玟廷「朝鮮前期対馬島人漁塩業と交流様相」; 朴花珍「日本近世漁村社会の成立と変貌」(신명호「조선초기 해양개척과 어장개방」; 최영하「조선전기 남해안의 어장과 어종」; 한임선「조선초기 염업발전과 대마왜인」; 김기훈「조선전기 남해안 조어왜인과 해양방어」; 김문기「嘉靖년간의 왜구와 江南 海防論」; 이근우「대마도의 지리와 역사」; 심민정「조선전기 대마도인 어염업과 교류양상」; 박화진「일본근세 어촌사회의 성립과 변모」)以上は釜慶大学校海洋文化研究所2007『朝鮮前期海洋開拓と対馬島』国学資料院、ソウル(부경대학교해양문화연구소2007『조선전기 해양개척과 대마도』국학자료원, 서울)。



## VII. おわりに

以上で、2000年から2007年までの韓国内で発表された朝鮮前期韓日関係史の研究成果を概観および外交体制、倭人の統制および接待、三浦と韓日関係、交易、使節の往来と文化交流、相互認識などの主題別に簡略に整理した。

朝鮮前期韓日関係史の研究は、1960年に活性化しはじめ、1990年代には特に外交体制と文化交流、相互認識に関する研究が活発になった。2000年代には、対日外交専門家である李藝と申叔舟に対する再評価と歴史教科書に関連した問題に研究が集中する傾向を示した。このように朝鮮前期韓日関係史研究は、量的・質的に剋目に値する発展を遂げた。しかし、外交体制、三浦倭乱以後の韓日関係と偽使、向化倭人、三浦の設置時期、三浦での倭人の生活と朝鮮人との交流、禁断権、対日貿易の規模および物品の流通、朝日貿易が朝鮮社会に及ぼした影響、教科書などの問題は、いまだに学説が対立していたり研究が不足していたりしているのが実情である。今後、これらに対する研究が活性化されることが望まれる。

最後に、朝鮮前期韓日関係史研究の課題と問題点を簡略に提示しておきたい。

第一に、研究の主題を多様に細分化し、考古学、人類学、民俗学、文学など隣接学問との共同研究を通じて、研究の幅を広げなければならない。第二に、新しい資料の収集・発掘とともに、『朝鮮王朝実録』など研究の基本史料に対する体系的な整理が至急なされなければならない。第三に、自国中心の歴史認識から脱皮して、より客観的に歴史を認識せねばならず、韓国の史料と日本の史料を比較検討して、研究の客観性を高めなければならない。最後に、韓国と日本に固定されている研究の視角を、東アジアの世界に拡大し、女真・琉球など周辺諸国との比較研究を通じて、韓日関係の特徴をより明確に明らかにしなければならない。

## 朝鮮前期韓日關係史研究論著目録 (2000年～2007年)

### 著述

- 韓文鍾2001『朝鮮前期向化受職倭人研究』国学資料院(한문중2001『조선전기 향화 수직왜인 연구』국학자료원)
- 韓日關係史研究論文集編纂委員會2005『倭寇偽使問題と韓日關係』景仁文化社(한일관계사연구 논문집편집위원회2005『왜구 위사문제와 한일관계』경인문화사)
- 李明勳編2005『李藝の使命—私は朝鮮の通信使である—』セロウンサラムドゥル(이명훈 편2005『李藝의 使命—나는 조선의 통신사로소이다—』새로운사람들)
- 韓日關係史学会編2006『通信使李藝と韓日關係』セロウンサラムドゥル(한일관계사학회편2006 『통신사 李藝와 한일관계』새로운사람들)
- 韓日關係史学会編2006『韓日關係2千年—見える歴史、見えない歴史』近世、景仁文化社(한일관계사학회편2006『한일관계 2천년 보이는 역사 보이지 않는 역사』근세, 경인문화사)
- 釜慶大学校海洋文化研究所2007『朝鮮前期海洋開拓と対馬島』国学資料院(부경대학교 해양문화연구소2007『조선전기 해양개척과 대마도』국학자료원)

### 論文

- 韓文鍾2000「朝鮮前期対馬早田氏の対朝鮮通交」『韓日關係史研究』12韓日關係史学会(韓文鍾2000「조선전기 對馬 早田氏の 對朝鮮通交」『한일관계사연구』12 한일관계사학회)
- 閔德基2000「日本史上の『国王』称号—日本中近世を中心に—」『韓日關係史研究』13韓日關係史学会(閔德基2000「日本史上의 ‘國王’稱號—일본 중·근세를 중심으로—」『한일관계사연구』13 한일관계사학회)
- 李薰2000「朝鮮前期漂流・漂着に対する朝鮮の認識と漂流民送還」『朝鮮後期漂流民と韓日關係』国学資料院(李薰2000「朝鮮前期 漂流·漂着에 대한 조선의 인식과 漂流民送還」『朝鮮後期 漂流民과 韓日關係』국학자료원)
- 孫承喆2001「朝鮮前期被擄・漂流民送還と東アジア国際秩序」『朝鮮時代韓日漂流民研究』国学資料院(손승철2001「조선전기 피로·표류민송환과 동아시아 국제질서」『조선시대 한일표류민 연구』국학자료원)
- 李薰2001「朝鮮前期朝・日間の漂流民送還と交隣」『朝鮮時代韓日漂流民研究』国学資料院(이훈2001「조선전기 조·일간의 표류민송환과 교린」『조선시대 한일표류민 연구』국학자료원)
- 韓文鍾2001「朝鮮前期倭人統制策と韓日關係」『京畿史論』4・5京畿大史学会(韓文鍾2001「朝鮮前期 왜인통제책과 한일관계」『京畿史論』4·5경기대 사학회)
- 張舜順2001「朝鮮前期倭館の成立と朝・日外交の特質」『韓日關係史研究』15韓日關係史学会(장순순2001「조선전기 왜관의 성립과 조·일 외교의 특질」『한일관계사연구』15한일관계사학회)
- 韓文鍾2002「朝鮮前期日本の大藏經求請と韓日間の文化交流」『韓日關係史研究』17韓日關係史学

- 會(한문중 2002「조선전기 일본의 대장경구경과 한일간의 문화교류」『한일관계사연구』17한일관계사학회)
- 韓文鍾2002「朝鮮前期の回顧と展望」『韓日關係史研究の回顧と展望』国学資料院(한문중2002「조선전기의 회고와 전망」『한일관계사연구의 회고와 전망』국학자료원)
- 韓文鍾2003「高麗末朝鮮初の『倭萬戸』」『全北史学』26全北史学会(한문중2003「고려말 조선초의 ‘倭萬戶’」『진북사학』26진북사학회)
- 河宇鳳2003「朝鮮前期對外關係に表われた自我認識と他者認識」『韓国史研究』123(하우봉2003「조선전기 대외관계에 나타난 自我認識과 他者認識」『韓國史研究』123)
- 孫承喆2003「日本歴史教科書高麗・朝鮮時代記述の歪曲実態分析」『韓日關係史研究』19韓日關係史学会(손승철2003「일본 역사교과서 고려·조선시대 기술의 왜곡실태 분석」『한일관계사연구』19한일관계사학회)
- 鄭成一2004「朝鮮の銅錢と日本の銀貨;貨幣の流通を通じてみた15-17世紀の韓日關係」『韓日關係史研究』20韓日關係史学会(정성일2004「조선의 동전과 일본의 은화; 화폐의 유통을 통해 본 15-17세기의 한일관계」『한일관계사연구』20한일관계사학회)
- 橋本雄2004「宗貞國の博多出兵と偽使問題—<朝鮮遣使ブーム>論の再構成のために」『韓日關係史研究』20韓日關係史学会(橋本雄2004「宗貞國의 博多出兵과 偽使問題—<朝鮮遣使 붐>론의 再構成을 위하여」『한일관계사연구』20한일관계사학회)
- 須田牧子2004「15世紀日本の朝鮮仏画輸入とその意義—大内氏の大藏經輸入を中心に—」『韓日關係史研究』20韓日關係史学会(須田牧子2004「15세기 일본의 朝鮮佛畫 수입과 그 의의—大内氏의 大藏經 수입을 중심으로—」『한일관계사연구』20한일관계사학회)
- 韓文鍾2004「朝鮮前期倭人統制策と通交違反者の処理」『日本思想』7(한문중2004「조선전기 왜인 통제책과 통교위반자의 처리」『日本思想』7. この論文は韓日關係史研究論集編纂委員會2005『倭寇偽使問題と韓日關係』景仁文化社(한일관계사연구논문집편찬위원회2005『왜구 위사문제와 한일관계』경인문화사에収録)
- 韓文鍾2004「朝鮮前期の回顧と展望」『韓日關係史研究の回顧と展望』国学資料院(한문중2004「조선전기의 회고와 전망」『한일관계사연구의 회고와 전망』국학자료원)
- 孫承喆2005「日本歴史書の中・近世韓日關係史に対する歪曲実像」韓日關係史研究論集編纂委員會2005『倭寇・偽使問題と韓日關係』景仁文化社(손승철2005「일본 역사서의 중·근세 한일관계사에 대한 왜곡실상」한일관계사연구논문집편찬위원회『왜구·위사문제와 한일관계』, 경인문화사)
- 柳在春2005「朝鮮前期偽使の發生背景について」韓日關係史研究論集編纂委員會2005『倭寇・偽使問題と韓日關係』景仁文化社(유재춘2005「조선전기 偽使의 발생배경에 대하여」한일관계사연구논문집편찬위원회『왜구·위사문제와 한일관계』경인문화사)
- 申東珪2005「『朝鮮王朝実録』内の日本国王使と偽使」韓日關係史研究論集編纂委員會2005『倭寇・偽使問題と韓日關係』景仁文化社(신동규2005「『조선왕조실록』속의 日本國王使와 偽使」한일관계사연구논문집편찬위원회『왜구·위사문제와 한일관계』경인문화사)

- 李明勳2005「朝日文化の交流の先駆者:通信使李藝の生涯と業績」李明勳編2005『李藝の使命—私は朝鮮の通信使である—』セロウンサラムドゥル(이명훈2005「朝日 문화의 교류의 선구자 :통신사 李藝의 생애와 업적」이명훈 편『李藝의 使命—나는 조선의 통신사로소이다—』새로운사람들)
- 韓文鍾2005「朝鮮前期李藝の対日交渉活動について」李明勳編2005『李藝の使命—私は朝鮮の通信使である—』セロウンサラムドゥル(한문중2005「조선초기 李藝의 대일교섭 활동에 대하여」이명훈 편『李藝의 使命—나는 조선의 통신사로소이다—』새로운사람들)
- 池斗煥2005「世宗代対日政策と李藝の対日活動」李明勳編2005『李藝の使命—私は朝鮮の通信使である—』セロウンサラムドゥル(지두환2005「세종대 대일정책과 李藝의 대일활동」이명훈 편『李藝의 使命—나는 조선의 통신사로소이다—』새로운사람들)
- 永留久恵2006「李藝が通信使として活動した時代の対馬」韓日關係史学会編『通信使李藝と韓日關係』セロウンサラムドゥル(나가도메 히사에2006「李藝가 통신사로 활동하던 시대의 對馬」한일관계사학회편『통신사 李藝와 한일관계』새로운사람들)
- 河宇鳳2006「李藝の日本認識」韓日關係史学会編『通信使李藝と韓日關係』セロウンサラムドゥル(하우봉2006「이예의 일본인식」한일관계사학회편『통신사 李藝와 한일관계』새로운사람들)
- 中田稔2006「『鶴坡先生実記』の構成および編纂過程」韓日關係史学会編『通信使李藝と韓日關係』セロウンサラムドゥル(나카타 미노루2006「『鶴坡先生實記』의 구성 및 편찬과정」한일관계사학회편『통신사 李藝와 한일관계』새로운사람들)
- 韓文鍾2006「世宗代李藝の対日交渉活動」韓日關係史学会編『通信使李藝と韓日關係』セロウンサラムドゥル(한문중2006「세종대 李藝의 대일교섭 활동」한일관계사학회편『통신사 李藝와 한일관계』새로운사람들)
- 李明勳2006「世宗代の対日通信使李藝」韓日關係史学会編『通信使李藝と韓日關係』セロウンサラムドゥル(이명훈2006「세종대의 대일통신사 李藝」한일관계사학회편『통신사 李藝와 한일관계』새로운사람들)
- 孫承喆2006「朝鮮前期韓日關係と塩浦研究」韓日關係史学会編『通信使李藝と韓日關係』セロウンサラムドゥル(손승철2006「조선전기 한일관계와 염포연구」한일관계사학회편『통신사 李藝와 한일관계』새로운사람들)
- 佐伯弘次2006「朝鮮前期韓日關係と対馬島」韓日關係史学会編『通信使李藝と韓日關係』セロウンサラムドゥル(사에키 코우지2006「朝鮮前期 韓日關係와 對馬島」한일관계사학회편『통신사 李藝와 한일관계』새로운사람들)
- 韓文鍾2006「朝鮮と日本に両属した対馬島」韓日關係史学会編『韓日關係二千年見える歴史見えない歴史』近世、景仁文化社(한문중2006「조선과 일본에 양속한 대마도」한일관계사학회편『한일관계 2천년 보이는 역사 보이지 않는 역사』근세, 경인문화사 これは韓日關係史学会編1998「対馬島は韓国の地か?」『韓国と日本 歪曲とコンプレックスの歴史』1チャチャクナム(한일관계사학회편1998「대마도는 한국땅이다?」『한국과 일본 왜곡과 콤플렉스의 역사』1자작나무)を、題目を修正して収録したものである)

- 韓文鍾2006「朝鮮に不法に渡航した倭人たち」韓日關係史学会編『韓日關係2千年—見える歴史、見えない歴史』近世、景仁文化社(한문중2006「조선에 불법으로 도항한 왜인들」한일관계사학회 편『한일관계 2천년 보이는 역사 보이지 않는 역사』근세, 경인문화사)
- 閔德基2006「室町幕府はなぜ朝鮮に中国問題の仲裁を渴望したのか」韓日關係史学会編『韓日關係2千年—見える歴史、見えない歴史』近世、景仁文化社(민덕기2006「무로마치 막부는 왜 조선에 중국문제의 중재를 갈망했을까」한일관계사학회편『한일관계 2천년 보이는 역사 보이지 않는 역사』근세, 경인문화사)
- 鄭智蓮2006「朝鮮前期対日私貿易研究」『韓日關係史研究』24韓日關係史学会(정지연2006「조선전기 대일 사무역 연구」『한일관계사연구』24한일관계사학회)
- 尹誠翊2006「『後期倭寇』としての乙卯倭變」『韓日關係史研究』24韓日關係史学会(윤성익2006「'후기왜구'로서의 乙卯倭變」『한일관계사연구』24한일관계사학회)
- 孫承喆2006「高麗朝鮮前期韓日關係史記述の共通点と差異点」『韓日關係史研究』25韓日關係史学会(손승철2006「고려 조선전기 한일관계사 기술의 공통점과 차이점」『한일관계사연구』25한일관계사학회)
- 閔德基2007「朝鮮前期の‘交隣’にみる対外關係」『前近代東アジア世界の韓日關係』景仁文化社(민덕기2007「조선전기 ‘교린’으로 보는 대외관계」『전근대 동아시아 세계의 한일관계』경인문화사)
- 閔德基2007「朝鮮前期の『日本国王』認識—『敵礼』を中心に—」『前近代東アジア世界の韓日關係』景仁文化社(민덕기2007「조선전기의 ‘일본국왕’ 인식—‘적례’를 중심으로—」『전근대 동아시아 세계의 한일관계』경인문화사、閔德基「朝鮮前期の‘日本國王’觀」『朝鮮學報』132, 1989に掲載)
- 閔德基2007「明代初期日本征伐論と朝鮮の対応」『前近代東アジア世界の韓日關係』景仁文化社(민덕기2007「明代 초기 일본정벌론과 조선의 대응」『전근대 동아시아 세계의 한일관계』경인문화사)
- 申明鎬2007「朝鮮前期海洋開拓と漁場開放」釜慶大学校海洋文化研究所『朝鮮前期海洋開拓と対馬島』国学資料院(신명호2007「조선초기 해양개척과 어장개방」부경대학교해양문화연구소『조선전기 해양개척과 대마도』국학자료원)
- 최영하(チェ・ヨンハ)2007「朝鮮前期南海岸の漁場と魚種」釜慶大学校海洋文化研究所『朝鮮前期海洋開拓と対馬島』国学資料院(최영하2007「조선전기 남해안의 어장과 어종」부경대학교해양문화연구소『조선전기 해양개척과 대마도』국학자료원)
- 韓任善2007「朝鮮初期塩業發展と対馬倭人」釜慶大学校海洋文化研究所『朝鮮前期海洋開拓と対馬島』国学資料院(한임선2007「조선초기 염업발전과 대마왜인」부경대학교해양문화연구소『조선전기 해양개척과 대마도』국학자료원)
- 김기훈(キム・ギフン)2007「朝鮮前期南海岸釣魚倭人と海洋防禦」釜慶大学校海洋文化研究所『朝鮮前期海洋開拓と対馬島』国学資料院(김기훈2007「조선전기 남해안 조어왜인과 해양방어」부경대학교해양문화연구소『조선전기 해양개척과 대마도』국학자료원)

- 金文基2007「嘉靖年間の倭寇と江南海防論」釜慶大学校海洋文化研究所『朝鮮前期海洋開拓と対馬島』国学資料院(김문기「嘉靖년간의 왜구와 江南 海防論」부경대학교해양문화연구소『조선전기 해양개척과 대마도』국학자료원)
- 李根雨2007「対馬島の地理と歴史」釜慶大学校海洋文化研究所『朝鮮前期海洋開拓と対馬島』国学資料院(이근우2007「대마도의 지리와 역사」부경대학교해양문화연구소『조선전기 해양개척과 대마도』국학자료원)
- 沈玟廷2007「朝鮮前期対馬島人漁塩業と交流様相」釜慶大学校海洋文化研究所『朝鮮前期海洋開拓と対馬島』国学資料院(심민정2007「조선전기 대마도인 어염업과 교류양상」부경대학교해양문화연구소『조선전기 해양개척과 대마도』국학자료원)
- 朴花珍2007「日本近世漁村社会の成立と変貌」釜慶大学校海洋文化研究所『朝鮮前期海洋開拓と対馬島』国学資料院(박화진2007「일본근세 어촌사회의 성립과 변모」부경대학교해양문화연구소『조선전기 해양개척과 대마도』국학자료원)
- 孫承喆2007「『海東諸國紀』の史的価値」『韓日關係史研究』27韓日關係史学会(孫承喆2007「『海東諸國紀』의 사료적 가치」『한일관계사연구』27한일관계사학회)
- 柳在春2007「『海東諸國紀』中の三浦を中心とした軍事防禦について」『韓日關係史研究』27韓日關係史学会(柳在春2007「『海東諸國紀』속의 三浦를 중심으로 한 군사방어에 대하여」『한일관계사연구』27한일관계사학회)
- 嚴燦鎬2007「『海東諸國紀』の歴史地理的考察」『韓日關係史研究』27韓日關係史学会(嚴燦鎬2007「『海東諸國紀』의 역사지리적 고찰」『한일관계사연구』27한일관계사학회)
- 申東珪2007「『海東諸國紀』にみる中世日本の国王觀と日本国王使の性格」『韓日關係史研究』27韓日關係史学会(申東珪2007「『海東諸國紀』로 본 中世日本の 國王觀과 日本國王使의 성격」『한일관계사연구』27한일관계사학회)
- 沈保京2007「『海東諸國紀』の地名に反映された韓日中世語表記法」『韓日關係史研究』27韓日關係史学会(심보경2007「『海東諸國紀』의 지명에 반영된 한일 중세어 표기법」『한일관계사연구』27한일관계사학회)